月は覗く

月は覗く

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18331926

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, メルル, 原作終了後

ヒュンマの戦後。
いつもどおりです。
ヒュンケルがネイル村に来て、初めての秋。

2022.9.10が、中秋の名月だったので、満月をテーマに１本書いてみたのですが、思ったよりも妖しい方向になってしまいました・・・。性的シーンはないですが、話題には出ていますので、ご注意ください。

余談ですが、最近は、月というと、メルルをイメージすることが多いです。神秘的な雰囲気が合うのかもしれません。

表紙画像は、ＡＣフォト様。

Table of Contents

月は覗く

　秋の満月は、１年で一番美しい。
　だから、その月を称えて、祭りをするのだという。
　ヒュンケルがネイル村に来て、初めて迎えた秋の季節に、マァムはそんなことを言って、月の見える窓辺に花と菓子を供えていた。
　マァムは、窓を開け、さっと、初秋の涼しい風を部屋に入れた。
　日中は、まだまだうだるような暑さが残る日々であったが、陽が沈むと、一気に気温が下がるのがこの季節の特徴だ。
　昼間の太陽に焦がされた火照った肌に、夜風が涼やかに、その熱を冷ます。
　この季節独特の過ごしやすさが、心地よかった。
「月の神様って、女神様なんですってね。」
　秋の野の花を束ねた素朴な花束を硝子瓶に生けながら、マァムがヒュンケルに語り掛けた。
「月と狩猟の女神さま。」
　ヒュンケルは感心したような声で答えた。
「森に囲まれたこの村にぴったりだな。」
　マァムも、彼が思った通りのイメージを抱いたことに喜んだのか、嬉しそうな声を上げた。
「そうなの。
　それで毎年、必ずお供えをしてたわ。
　それでね、月の神は女神さまだから、女神さまにってお花をお供えするんだって、子どものころに聞いたの。」
「そうなのか。
　地方によって風習に違いはあるんだな。」
　ヒュンケルは答えながら、流石に地底魔城には、月の女神を称える風習はなかったなと思った。
　ヒュンケルは、窓の向こうに視線を送った。
　ネイル村を囲む森の上に、煌々と照る、明るい真円の月が上っている。
　欠けるところのない満月だ。

その神秘的な光を瞳に映しているうちに、ヒュンケルは、ふと、誰かの言葉を思い出した。

―満月には、魔力があるそうです。
―魔力？
―ええ。
　人を狂わせる魔力です。
　満月の夜には、思いもかけないような事件が起こると言われていますが、それは月の魔力に惑わされたからだ、と。
　その真偽はわかりません。
　ですが、満月の夜は、確かに、普段とは異なる感覚を、肌で感じます。
　貴方にも、お分かりではありませんか？
―・・・そうだな。
　地底魔城にいたアンデッドモンスターたちも、満月の夜は落ち着きがなくなっていたな・・・。
―それだけでしたか？
―・・・そう言うということは、君も感じているのだな。
―・・・はい。
―なるほど、確かに君の力は一流だ。
　君の思っているとおりだ。
　満月の夜は・・・暗黒闘気が強くなる。
　俺が幼いころから、そうだった。
　あのころから、地底魔城のモンスターたちは、満月の夜には、暗黒闘気がみなぎり、普段よりも活発に、好戦的になっていた。
―いまは・・・どうですか？
―暗黒闘気のことか？
―・・・ええ。
―そうだな・・・多少のざわつきは覚えることはあるが、その程度だ。
　満月に影響を受けるほどではないな。
―それなら、よかったです。
　ただ、お気を付けを。

貴方は、とても目を引きます。
特に闇のものから見たら、まぶしいくらいに。
満月の夜は、そういった闇のものが強く影響を受けます。
貴方の周囲にも、そんな影が現れるかもしれませんから・・・。
—わかった。
忠告、ありがとう。
だが、いま俺が恐れているのは、そんな闇のものたちではない。
闇のものよりも、暗黒闘気よりも、ずっと・・・恐ろしいものはある。

あれはまだ、大魔王との戦いが終わって間もない頃のことだった。
あの戦いの中で、強い魔力に目覚めた占い師の少女は、ヒュンケルにそう言って忠告をしてくれた。
ヒュンケルは、黒い存在や闇の勢力を引き付けやすいのだと、彼女は語った。
それは、彼が長年、魔王軍に身を置いていたせいなのか、あるいは彼自身の特性なのかはわからないと言っていた。
だが、アンデッドモンスターを統べる立場であったヒュンケルにとっては、彼女、メルルの言葉は腑に落ちるものであった。
メルルは語った。
満月には、魔力がある、と。
しかし、メルルの言葉を聞いてもなお、ヒュンケルにとっては、真に恐れるのは、黒い存在でも、闇の勢力でもなかった。
外からくる存在ならば、いくらでも対抗できる。
真に恐ろしいのはー。
ヒュンケルは、意識を現在に戻した。
そして、彼は、開け放たれた窓の向こう、森の上に浮かぶ満月を見上げた。
白とも金ともつかない光を放っており、いっとき、雲に隠されてもその明るさははっきりと見て取れた。
まるで、何者にも妨げることができないと語るかのような、強い意志の光の如く。

それは、一部の欠けもない真円であり、完全なる美しさを持っていながらも、どこか、冷えた恐ろしさを感じさせた。
　ヒュンケルは、リビングの椅子に腰かけたまま、日常に身を置いているはずであるにもかかわらず、幻想の世界に引き込まれて行くような錯覚を感じた。
　彼は、ぽつりとつぶやいた。
「美しいな・・・恐ろしいくらいに。」
　その言葉に、窓辺に立っていたマァムが振り返った。
　そして、ヒュンケルの眼差しを見ると、再び窓の向こうに目をやり、月を見上げた。
　マァムの背中に向かって、ヒュンケルは言葉をかけた。
「月には魔力がある、とメルルが言ったことがあった。
　普段は、あまり意識はしないが、こんなに大きな満月を見ていると、彼女の言っていたことも分かるような気がする。
　美しいが、恐ろしい。」
「・・・うん。」
「まるで、見透かされているようでな・・・。」
　そう語るヒュンケルの声は、どこか寂し気だった。
　ヒュンケルの言葉を背中で受け止めながら、マァムは彼に尋ねた。
「落ち着かない？」
「少し、な。」
「・・・暗黒闘気のせい？」
　ためらいがちに尋ねたマァムの問いを、ヒュンケルははっきりと否定した。
「いや、違うな。
　もういまは、俺の中に残った暗黒闘気は、わずかだ。俺に強い影響を及ぼすほどではない。
　多少・・・ざわつきはするがな。
　どちらかというと、俺自身の問題だ。」
　ヒュンケルの中の暗黒闘気は、完全に消えているわけではなかった。
　それはマァムも知っていた。そして、それが何故なのかも。

ロロイの谷でも、バーンパレスでも、ミストバーンに飲まされた、あるいはミストバーン自身だった暗黒闘気は滅したはずだったのに。
　マァムは、振り返らずに尋ねた。
「ヒュンケル。」
「なんだ。」
「貴方が暗黒闘気を飲んだのは・・・あのロロイの谷が初めてじゃなかったのよね・・・？」
「ああ・・・。
　何故そう思った？」
　マァムは答えなかった。
　答えられなかった。
　あの戦いの後で知った、ヒュンケルとミストバーンとの関係。
　ミストバーンが、ヒュンケルを自身の器にするために育てていたこと。
　それだけ知っていれば、想像は容易だった。
　つまり、ミストバーンが、ヒュンケルを自身の器にふさわしいものに育てるために、暗黒闘気を幼いころからヒュンケルに馴染ませていたであろう・・・と。
　黙ってしまったマァムの背中を見つめながら、ヒュンケルもまた、それ以上、彼女に尋ねようとはしなかった。
　代わりに、彼は別のことを口にした。
「暗黒闘気は、負の感情を増幅させる。
　だが、恐ろしいのは、暗黒闘気じゃない。
　・・・自分自身、だ。
　こんなに強い月を見ていると、自分の中の黒い感情まで見透かされそうで、恐ろしいと思う。」
　ヒュンケルの言葉に、マァムはうなずいた。
「うん・・・確かに、怖いくらい綺麗、ね。」
　だが、同じ言葉を使っていながら、彼女は、ヒュンケルとは逆の意味を口にしていた。
　マァムは窓の外を見つめながら、呟いた。
「それに、明るい。」

マァムは言葉をつづけた。
「私、森に囲まれて育ったせいなのか、月を見ると、ほっとするの。
　明るい、あの方向に行けば大丈夫だって。」
「そうか、道しるべになるんだな。」
「うん、そう。」
　そうして、彼女はいったん言葉を区切ったが、また言葉をつづけた。
「・・・そうね、確かに月を見ていると、心の奥底まで見透かされそうな気がするっていう、ヒュンケルの感覚、私も解るわ。
　月夜にもやもやしちゃって、なんだか落ち着かないこともあったもの。」
　ヒュンケルは、驚いたように聞き返した。あまり、マァムからは聞かない内容のことだったからだ。
「マァムが、か？」
　マァムはうなずいた。
「うん。
　誰にだって、暗い感情ってあるものね。
　正直に言っていい？
　こんなこと言ったら、ヒュンケルは嫌かもしれないけど・・・。」
　一瞬、言い淀んだマァムに向かって、ヒュンケルは穏やかに声を掛けた。
「どうした。何でも聞くぞ。」
「ありがとう。」
　マァムは、ヒュンケルに振り返った。
　そうして、彼女はヒュンケルに歩み寄ると、かがみこむようにして、座っている彼の胸に頬を寄せた。自然、ヒュンケルは、マァムを抱きしめる形になる。
　彼の胸元のシャツを握りながら、ヒュンケルの厚い胸板に頬を寄せ、マァムは呟いた。
「あのね・・・私、ヒュンケルのこと、好きなんだって、気付いたころが、一番苦しくて、辛かったの。

自分の中の、真っ黒な感情とか、どんどん沸いてきちゃって。
　不安だったし、怖かったし、変なことで嫉妬したり。」
「・・・そう、だったのか。」
「うん。
　でも、貴方がそんな私の気持ちも全部含めて受け止めてくれたから・・・私のことを丸ごと愛してくれたから・・・今は、すごく安心している。
　ありがとう、ヒュンケル。」
「そうか・・・。」
　ヒュンケルは、大きく息を吐くと、そのままマァムを抱き締め続けた。
　そうして、マァムの温もりを感じながら、ヒュンケルもつぶやいた。
「俺は、子どもだな・・・。
　今でも俺は、お前のことになると、落ち着かなくなることがある。」
「そうなの？心配？」
　腕の中で自分を見上げるマァムを見つめながら、ヒュンケルは苦笑気味に答えた。
「お前が魅力的すぎるからだ。
　少しは気を付けてくれ。」
　そう言って、ヒュンケルは、子どもにするように、くしゃくしゃとマァムの頭を撫でた。彼の言葉に、一瞬、頬を赤らめたマァムだったが、子どものように撫でられて、ぷうっと頬を膨らませた。
「もう、そればっかり。」
　マァムは、先ほどのヒュンケルの言葉を思い出し、彼に尋ねた。
「見透かされそうって、そういうことなの？」
「いや、そうじゃない。」
「じゃあ・・・？」
　マァムが見上げる中、ヒュンケルは、彼女の顎に手をかけた。そのヒュンケルの瞳に、鋭い眼光が宿る。まるで、獲物を見つけた獣のような眼差しだった。
　ヒュンケルの声が、低く響く。

「お前を、飽きるほど愛したいと思ってしまう。
　どれほどお前を抱きしめても、お前を抱いても、足らない。
　誰よりもお前の近くにいるというのにな。
　これは、暗黒闘気のせいじゃない。」
「ヒュン・・・っ！」
　そうして、マァムの反論を許さないかのように、彼女の唇を塞いだ。
　強引に口づけ、ヒュンケルは油断のならない笑みを浮かべながら、マァムに告げた。
「だから言っただろう、恐ろしいのは俺自身だと。」
　そうして、一瞬で、剣呑な気配を消すと、彼はいつものように穏やかな笑みを浮かべた。
「心配するな。お前の嫌がることはしないさ。」
　すると、今度は、マァムが呟いた。ヒュンケルの胸元に顔を埋めて、その表情はうかがえないが、か細い声だった。
「・・・嫌じゃないって言ったら？」
「え？」
「言ったでしょう、私にも黒い感情はあるって。
　これを黒いって言っていいのかはわからないんだけど・・・。
　でも・・・。」
　マァムは、そこで言葉を区切った。言いたいことがあるのに、ためらっている様子がはっきりとわかる。
　ヒュンケルは、安心させるように、そっとマァムの髪を撫でた。
　すると、ヒュンケルの胸元のシャツを握る彼女の手に、ぎゅっと力が込もった。
　マァムは、震える声で、囁くようにヒュンケルに答えた。
「お願い、ヒュンケル。
　私を・・・愛して。」
　ヒュンケルは息を飲んだ。まだマァムは顔を伏せたままだったが、うつむき加減に見える口元は、いつもよりずっと紅く見え、妖艶ささえも感じられた。
　マァムは呟いた。
「こんなこと言ったら、嫌われちゃうかもって思って・・・。恥ず

かしくて、言えなくて・・・。
　でも、私も、貴方が欲しいときがあるの。貴方に触れたい、愛してほしいって・・・。」
　ヒュンケルは、そのままマァムを強く抱きしめた。彼女の背中に腕を回し、ぐっと引き寄せる。マァムの面が、ヒュンケルの肩に乗せられた。
　ヒュンケルはうめくように言った。
「・・・そんなことを言われたら、抑えられなくなるぞ。」
　だが、マァムはその言葉を恐れはしなかった。
「構わないわ。
　貴方なら・・・。」
　ヒュンケルは、マァムを抱きかかえたまま、立ち上がった。彼に横抱きに抱えられたマァムは、そのまま、彼の首に腕を回した。
　ヒュンケルの熱っぽい言葉が、吐息とともに、マァムの耳に届いた。
「・・・今日は手かげんしない。」
「うん・・・。」
　マァムは、まるで悪戯がばれたかのように、恥ずかしそうにつぶやいた。
「言っちゃった・・・。
　これも月の魔力のせい、かしら。」
「そうかもしれんな。
　それでもいいさ。」
　マァムを腕に抱きながら、ヒュンケルは思った。
　マァムの黒い感情ごとヒュンケルが受け止めてくれたと、マァムは言ったが、それは逆だ、と。マァムの方こそ、暗黒闘気よりも、ずっと危険な感情ごと、ヒュンケルを受け止めている、と。
　図らずも、それは、月が暴いた胸に沈めたはずの、ふたりの想いだったのかもしれなかった。